大湯線（久大線の前身）ものがたり

牧　達　夫

明治維新後の明治十八年（一八八五）、南大分の明磧と稙田、宗方間の大分川に明磧橋が架橋されると、南大分をはじめ周辺の様相は一変する。大道から堀切峠（永興）、三ケ田町、田中、明磧への道が新設され、明磧橋を渡って稙田に抜けた。そしてこの道筋に多くの商店が進出して軒を連ね、一大商店街が形成された。大分川に橋が架設されたことによって、新道ができ、一大幹線道路となった。だが、大分川沿いの地域住民にとって、人や物を遠くまで運ぶ鉄道が次なる悲願であった。この時代、多くの人は長い距離でも徒歩であった。時が流れ、明治末から大正初めにかけて、有力者らが地域の要望を受けとめ、大分川沿いに大湯鉄道株式会社による軽便鉄道の開設を計画する。許可から工事完成までの動きを次に記す。

○大正元年（一九一二）十一月十五日

大湯鉄道が許可される。

○大正二年（一九一三）三月

沿線の一市（大分市）、十一村（賀来・稙田・石城川・由布川・挟間・谷・阿南・南庄内・西庄内・湯平）の有志が協議会を開く。

○同年三月三十日

大分市内で発起人会を開き、創立委員長に小野駿一、委員に佐藤庫喜・官吉兄弟、三浦数平（のち二代目大分市長）、立川涌など十六名を選出。

○同年八月二十五日

大湯鉄道株式会社が資本金四十万円で設立され、社長に小野駿一、副社長に佐藤庫喜が就任。

○大正三年（一九一四）五月二十三日

内閣の認定を受ける。のち八月二十日、黒金泰義知事は「大分市大湯鉄道株式会社起業の軽便鉄道敷設ノ為収用スル土地ノ細目」を示す。

○同年十一月

大湯線の工事着工。

○大正四年（一九一五）五月二十三日

大湯線の「大分市駅～小野屋駅」間が開通。

大湯線とは、字が示すとおり、大分－湯平間の鉄道の名称であるが、諸種の都合で同社による開通は小野屋までであった。大分市駅からの駅は、古国府－永興－賀来－森ノ木－平横瀬－向之原－鬼ケ瀬－櫟木－小野屋の各駅であった。駅の所在地はいまの久大線の駅とは異なった処もあり、大分市駅はいまの大分駅の北東にある駐車場辺りにあり、古国府駅は元町～古国府トンネルの西方一〇〇メートルの処、永興駅（南大分駅）はいまの南大分駅の東方三〇〇メートルの場所にあった。小野屋駅は東長宝間ケ田に設置されていた。機関車はドイツ製、イギリス製の二両、水槽をボイラーの両側に配置したタンク車で、エントツは長く突出していた。大湯線の区間にはいくつかの難所があったといわれており、最大の難所は森ノ木～

平横瀬間の田迎の坂であった。雨の日は軽便がスリップすることもあり、線路に砂を撒き、一度バックして加速をつけて登ったという。また元町から古国府駅へ入る際には、上野丘陵の突端・龍ケ鼻を大きく迂回し、岩屋寺石仏の前まで登り、現在の古国府トンネルの西出口の先に向った。　民間活力による大湯線の開通は、沿線住民に恩恵を施し、駅周辺に活力をもたらした。永興駅近くには三ケ田町商店街があり、駅の設置によりさらに活況を呈した。大分～小野屋間のほぼ中間点にある向ノ原駅は地域の農産物等の集散地点となり、駅周辺地域は賑わいを見せるようになった。大正五年の大分市駅乗降客数は月平均一四、八八二人だったといわれ、いかに多くの人が利用したかがわかる。この年、一番多かった月は九月で、賀来の市で賑わった当時がしのばれる。小野屋駅周辺の活況については後述したい。

◎大湯線のその後

大正四年、大分～小野屋間に開通して多くの沿線住民によろこばれ、駅周辺地域の活性化に寄与した大湯線は、折からの経済不況と資金難から、大正十一年十二月一日、国（鉄道省）に買収された。同省は久留米～大分を結ぶ久大線開通に着手し、大正十二年、ようやく小野屋・湯平間が開通、さらに大正十四年、由布院盆地の北由布駅（現在の由布院駅）まで延びる。そして昭和九年（一九三四）、久大線全線開通となった。

◎大湯線社長・小野駿一のこと

大湯線設立時の社長で大株主であった小野駿一は、明治十五年（一八八二）、古国府・下田中の旧家、小野吉彦の長男として生まれる。父吉彦は明治二十五年衆議院議員に当選する。その後、大分県農工銀行初代頭取、大分銀行頭取などに就任する。　駿一は大分中学を卒業後、早稲田大学英法科・政治経済科を卒業するが、明治四十一年、父吉彦の死去により帰郷する。その後大正四年、三十八歳で大分銀行頭取に就任。ちょうど大湯線の社長に就任した頃である。さらに大分セメント社長、豊州瓦斯専務、大分農工銀行頭取、小野汽船、国東鉄道などの役員に就き、大分県実業界のトップリーダーとして活躍した。ところで、この小野駿一宅にのちに作家となる林房雄が大正七年、大分中学三年の頃、住み込み家庭教師となる。林房雄は戦後、二つの作品にその頃の苦学生時代を自伝的に書いている。

『太陽と薔薇』

「二十戸に足らぬ村（古国府下田中）の家々は、どれもよく似てゐる。空気には、木の葉の匂ひ、土の匂ひ、花の匂ひが立ちこめてゐる。家々は夫々の匂ひを戸口から吐き出す。この村にも、豊かで幸福な時代があったかも知れぬ。白壁や庭の太い柱に、その時代の名残らしいものをとどめてゐる家も幾軒かある。（中略）丘をめぐって溝川（初瀬井路）が流れてゐる。溝川に沿った道を毎朝中学に通ふ。道の両側には野茨の繁みがある。幹の赤い虎杖（すかんぽ）が若竹のやうにのびてゐる。晴れた日がつづくと、溝川の水は水硝子のやうに澄み、水藻のかげに糸鰻の白い腹が光る。・・・」

『美しき母への賛歌』

「県立中学校は丘の上の杉木立の中にある。丘の上からは、古い城址に新しく建築された県庁と公会堂と隣の県立女学校が見え、その彼方に松原と海が見えた。校庭の片隅に老松に囲まれた社（松坂神社）があり、そこからは広々とした田圃（南大分平野）が見渡され、その後方に霊山と本宮山がゆったりと並び立っている。・・・」

林房雄は下宿していた古国府下田中の旧家の様子や村の匂いを描き、初瀬井路の美しき流れを観察し、上野の大分中学からの眺めになつかしき思い出として書いたのであろうか。私はいまから六十年前の小学生時代、林房雄が描いた村中や野山を駆け回ったことを、いま思い出している。

今日の南大分、古国府周辺は上野・永興丘陵以外の平地は高層ビルが林立し、民家が建ち並び、道路はコンクリート化し、房雄の描いた風景はそのよすがさえ見い出せない。しかし久大線の古国府・南大分以西の賀来・向之原・鬼ケ瀬・小野屋・庄内・湯平・由布院周辺の山際、土手、水辺、路傍にはいまも美しき自然風景が広がっており、この幸を大切に守ってゆくことが大切である。

◎大湯線開通によって発展した町小野屋

小野屋は大分川、小挟間川、芹川の三つの川の合流点にあり、盆地の真ん中で一段低く、川の流れに沿って東西に細長く南北が短い町並である。

昔は道らしい道もない寂しい村であったが、明治二十八年、佐賀県道の道路ができると、村に相当数の家が集まったという。さらに大正四年、大湯線の大分～小野屋間に鉄道が開通すると、町の様相は一変する。小野屋駅は終点でもあり、人の往来が急激に増え、小野屋の町には旅館、飲食店ができ、呉服反物、日用品、食料品、鮮魚、精肉、雑貨、小間物等七、八十軒の店が軒を並べて賑わった。

直入、阿蘇野、湯平、由布院の人々、近郊の西・南庄内等の人々までも小野屋に泊まりに来るようになる。大分に行く時にも、前の日に小野屋に泊まり、翌朝汽車で大分に行く。

また乗合馬車もあり、湯平・由布院行きと、大分方面行きとがあって、結構利用客も多かったという。夜のとばりに包まれると、三味線の音色、若い芸妓の声、宿泊客の酔った高笑いが止まらぬ町であった。

近年、国道二一〇号線が開通してからは、次第に寂れていったが、毎年夏に開かれる小野屋十七夜観音祭には、いまも多くの客で賑わっている。私も二年前、祭り見物に訪れ、小野屋酒店で酒を味わいながら店の奥方から小野屋今昔の話をうかがった。小野屋の地名はこの小野屋酒店が発祥らしい。いい祭りだった。

近年の日本列島、やれ高速道、やれ新幹線と光の部分ばかり追い求め、陰の部分の過疎化を助長している。その挙句、「過疎化をどうするか！」と声ばかり。この辺で、国、自治体、地域社会で、一工夫、二工夫考える時が来ているのではないだろうか。

参考文献

○挟間町誌（挟間町）　○小野屋商店街黄金の日々（小野延造）
○南大分周辺の歴史散歩（牧　達夫）